

財団法人

住吉隣保館ニュース

No.4

■編集・発行 財団法人住吉隣保館

■編集発行人 友永健三

財団法人住吉隣保館 〒558-0054 大阪市住吉区帝塚山東5-3-21
 TEL 06-6674-3732 FAX 06-6674-7201 <http://www.sumiyoshi.or.jp/>

この号の内容

- 1 市民交流センターすみよし北
特別事業『邪馬台国時代の
住吉』(1)～(6)
- 2 住吉地区に関わった各種資
料の整理事業について(6)

市民交流センターすみよし北・特別事業

～住吉さんと地元の1800年から学ぶ～

邪馬台国時代の住吉

1800年前の痕跡をさぐる

講師 京嶋 覚さん（（財）博物館協会・大阪文化財研究所学芸員）

7月13日13時30分から「住吉さんと地元の1800年から学ぶ」の講座（市民交流センターすみよし北の特別事業）の第3回として、NPO かなえ会理事長池田外美雄さんの司会で、財団法人大阪市博物館協会大阪文化財研究所学芸員京嶋覚さんのお話があった。「邪馬台国時代の住吉～1800年前の痕跡をさぐる～」と題されたお話は、パワーポイントが駆使され、写された地図や写真などでムラや港の全体的な位置関係・立地がよく分かり、遺跡・遺物についての具体的なイメージを持つことができた。

[以下の文中特に必要と思われる箇所のみパワーポイントについての注をいれたが、それ以外でも使われているので、適宜読み取って頂きたい。また、この報告は当日の講演を事務局でまとめ、講師に手を加えて頂いた。]

はじめに

大阪文化財研究所は、住吉の発掘調査を本格的に始めた1981年から30年ほど発掘をしてきました。当初住吉で発掘をしていた時には、色々な物がたくさん出てきても、遺跡なのだから出てきて当たり前のように思っていたのですが、最近、他の遺跡の発掘をたくさんする様になり、やはり住吉って凄い所だなあと改めて思うようになりました。色々な時代の物がたくさん出てくる点で、住吉は大阪の中でも特別な所だと改めて思います。今日は「住吉大社御鎮座 1800年」に因んだ講演会ということですので、1800年前の住吉について考古学の立場からお話をしていこうと思っています。

住吉の三神が住吉の地に祀られたのは、中世に編纂された『帝王編年記』によれば西暦211年となっていて、これに基づき「御鎮座 1800年」ということで色々な記念事業が行われています。この211年というのは必ずしも確かなものとは言えず、『日本書紀』などでは少し年紀が変わりますが、3世紀前半ごろという点においてはそう大きく変わらないといえます。

この3世紀前半がどういう時代かという、考古学では弥生時代の終末期にあたります。弥生時代というご存知の様に稲作が始まった時代です。稲作農耕のた

めに人々が定住してムラが形成され、さらに地域社会が生まれます。その時代の後半の時期は、地域がだんだん纏まっていくと同時に、水利や耕地をめぐる地域間の抗争があり、中国の文献に「倭国大乱」と記録されるような時代でもありました。終末期になると列島全体を治める集団がでてくるのですが、それが邪馬台国の女王卑弥呼です。卑弥呼を女王に立てることで倭国の戦乱が収まったと、これも中国の歴史書の中に書かれています。邪馬台国の時代というのは、弥生時代という時代が終わって、より大きな地域の纏まりができ、日本列島が統一されていく時代といえます。そういう時代の住吉の辺りがどういう風になっていたのかを、これからお話したいと思っています。資料とともに正面の画面の方で写真・図面など見て頂きたいと思います。

まず、邪馬台国時代の住吉の前史として、弥生時代の住吉についてお話したいと思っています。

弥生時代の住吉と大阪

住吉の弥生時代の遺跡としては山之内遺跡と南住吉遺跡があります。

山之内遺跡は山之内4丁目の市営山之内住宅がムラの中心です。あと、JR 阪和線を越えて大阪市立大

学のグランドの辺りで弥生時代のお墓が見つかります。

2000年くらい前の弥生時代中期の古地理図を見ると、山之内遺跡は大阪湾に面した上町台地上にあったことが分かります。



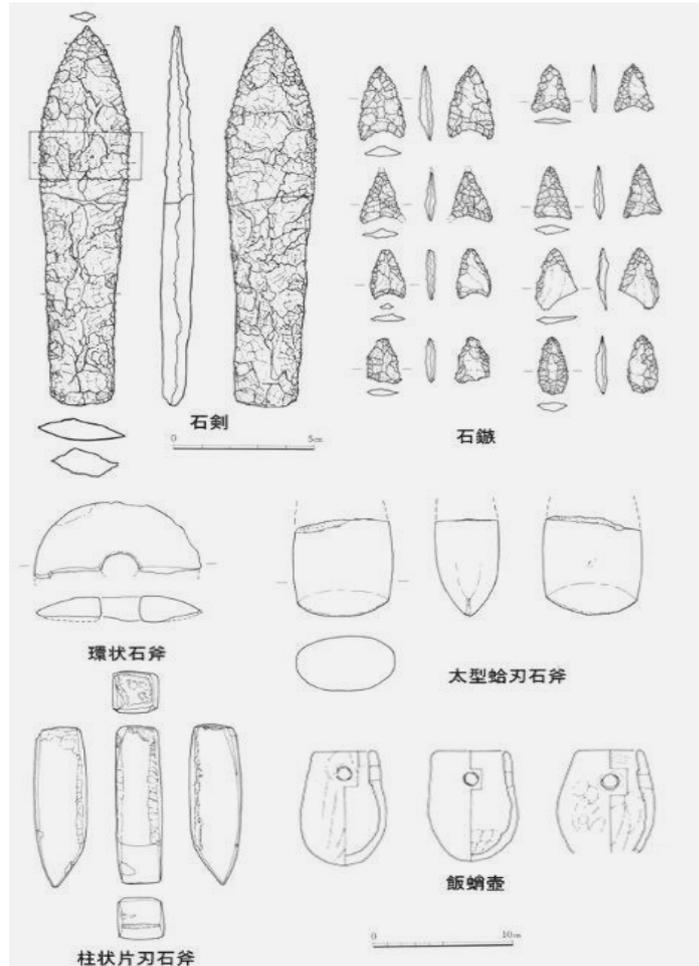
南住吉遺跡は山之内遺跡より北にあり、住吉大社の少し南にあります。南住吉遺跡では1箇所だけ弥生時代中期の円形の竪穴住居跡が見つかる場所があります。竪穴住居は何度も建て替わられており、石器や土器が出土しています。今日は発掘によってムラ全体の様子がわかる山之内遺跡の話を中心にしたいと思います。

山之内遺跡ではたくさんの住居跡やお墓の跡が見つかります。いずれも弥生時代中期のもので、竪穴住居は地面を直径5~7mの円形に掘りくぼめるので、床面は地上より少し低くなります。その床面に穴を掘って柱を6本立て、上は屋根を伏せた様な感じの構造になります。真ん中に煮炊きや暖をとるために火を焚く炉穴が掘られています。床面の外周には溝が廻らされています。この溝は土のままの壁面に壁板を立てるためと、壁からしみ出してくる水が中に入って来るのを防ぐ排水のために掘られたと考えられています。この時代の竪穴住居は大きさや柱の数に多少違いはありますが、ほとんどがこの形で、山之内遺跡で出てきている住居もこの形です。(パワーポイントの画面で住居構造と石器の詳細の確認)

山之内遺跡の住居跡からは石器が多く出てくるのが特徴だと思います。二上山でとれるサヌカイトという石で作られた打製石器で、矢の先に付けるヤジリ(石鏃)、大型石器である石剣・石槍などがあります。石剣は両側に刃があり、刃のないところが持ち手になります。他の遺跡では、持ちやすいよう桜の皮が巻かれているものも出土しています。こうした完成品とともに、作る時にできた石のかけらも住居の中からたくさん出てきました。なかには素材となるような大きなサヌカイトの塊も出てきます。ムラの人達が盛んにサヌカイト製の石

器を作っていたことが伺え、これが山之内のムラの1つの特徴であると考えています。

もう1つの石器として磨いて作る磨製石器があります。刃先が蛤に似ている太型蛤刃石斧、割れて半分しかないのですがドーナツみたいな環状石斧(外周全体が刃になり、中央の穴に木の柄を通して使う)、断面が四角く片刃の柱状片刃石斧といった石斧類が多いというのも特徴です。特に出土量の多い太型蛤刃石斧はほとんどが砂岩製で、使っているうちに折れて、穀物や豆を搗り潰すための搗り石、つまり搗りこぎのような道具に転用されています。蛤刃石斧は樹木などを伐採する時に、柱状片刃石斧は木材を加工する時などに、環状石斧はおそらくは武器に使われたと考えられています。蛤刃石斧をはじめとする石斧が多いのも山之内遺跡のムラの特徴であることから、おそらく、山之内4丁目辺りは森か林みたいになっていて、木々を伐採してムラや畑を切り開いていったのではないかと考えています。上町台地の西縁にムラがありますので、ムラからは西の大阪湾を見渡すことができ眺めが良かったと思いますが、東の方は木々が生き茂っており、東の河内平野側からはムラは隠れて見えなかったでしょう。



この遺跡のもう一つの特徴としては、飯蛸壺が出土する点にあります。大阪湾での飯蛸漁は弥生時代中期から始まり、現在もやっています。山之内のムラでは口の所に紐穴のあいた弥生時代の飯蛸壺だけでなく、

紐を通すところが底に付く釣り鐘形の古墳時代の飯蛸壺も出ています。弥生時代の山之内のムラでは大阪湾の飯蛸などの海産物を捕って生活していたことが分かります。

稲作農耕を行った証拠となる石庖丁も出土していますが、他の遺跡に比べて少なく、あまり農業は盛んでなかったと考えられ、大阪湾での漁業を中心とした生活であったと推定されます。

さて、このムラでは打製石器類が多く作られているのが特徴だと申しました。弓矢は縄文時代では動物を狩るための道具でしたが、弥生時代の弓矢は通常、戦争のための武器であったと考えられています。それは最初に言いましたように、弥生時代の社会は地域間の抗争がどんどん激しくなって、中国の歴史書の中にも書かれるくらい戦争をずっとやっていたわけです。特に弥生時代の中期というのはそれぞれの地域のムラが発達していった時代ですので、発達すればするほど隣接する他の地域との利害対立が激化し、戦争がおこる。その時に使われた主要な武器が弓矢や・剣・槍だったと考えられます。磨製石器にも武器として使われたと考えられる環状石斧があり、蛤刃石斧も木を伐採するだけではなく、武器としても使われた可能性があります。山之内の人達は常に武器を作り続け、いつも武装している人達だったのではないかと考えられます。

そのことを象徴する事例があります。山之内4丁目の市営住宅の敷地の北の方でお墓が見つかっています。このお墓の周りには溝があり、この溝の深くなっている所で完全な形の壺が立って出てきました。お墓の周りには、葬式の時に使った弥生土器がほぼ壊されずにそのまま出てくることが多いのです。お墓の真中の所に人を埋葬した穴が残っていて、おそらく木のお棺に納められて埋められていたと思うのですが、木のお棺も骨も残っていませんでした。ただ中を埋めている土をあとで洗ったら、石の鍬が完全な形で1個出てきました。おそらくここに埋葬された人に刺さっていたものと思います。戦争で矢を受けて命を落とし、ここに埋葬されたんだろうと推測できます。

次にお話するのが同じ時代の大和川と淀川デルタの台地・丘陵縁辺の弥生ムラについてです。(パワーポイントの画面で立地の確認)

弥生時代中期の段階では大和川や淀川によって運ばれてきた土砂で陸地が広がっています。最近、鶴見区・都島区や東成区などで人が住んでいることは確認されませんが、土器が出てくるとか地層の状況から見て、湿地などとして陸地化していたのではないかと確認できる場所がぽつぽつと見つかってきています。古地理図で見ますと広い河内湖の中になっていますが、実際には島状に陸地になっている所があちこちあったのではないかとイメージに最近変わってきています。大和川流域は肥沃な平地になっていて、川も網の目状に流れていて灌漑も容易で稲作に適していたと思わ

れ、弥生時代のムラがどんどん形成されていきます。淀川のあたりでも、旭区の森小路遺跡・東淀川区の崇禅寺遺跡・北区の同心町遺跡といった淀川が運んできた土砂でできた砂堆にムラができています。河内平野に比べるとそれほど広い範囲の水田耕作は難しかったのではないかと思います。森小路遺跡などは先程の穂摘み具の石庖丁がたくさん出てくるので、かなり稲作もしていたと考えられます。

台地上の山之内遺跡はこれら平地の遺跡とは異なった生活環境にあったと考えられます。次に本日の本題の時代についてお話いたします。

邪馬台国時代の住吉と大阪

実は住吉区内ということになると、この時代の遺跡は現在まで確認されていません。「住吉大社御鎮座 1800年」というのにその時代の遺跡が無いという怒られそうですが、無いということではなくて、今のところ見付けられていないということです。おそらく今まで発掘していない所にあるんだろうと思います。現在わかっている資料からみて、住吉区の周辺で一番私が注目しているのが阿倍野筋南遺跡です。(パワーポイントの画面で立地の確認)

地図に邪馬台国時代にあたる弥生時代末期から古墳時代前期のムラを赤く囲って表示しましたが阿倍野筋南遺跡の他は、東住吉区の鷹合・矢田部に若干あるくらいです。上町台地上のこの時代の遺跡は非常に少ないのですが、唯一まともに出てくるのが阿倍野筋南遺跡です。

阿倍野筋に面して弥生時代終末から古墳時代前期の竪穴住居や掘立柱建物が見つかっています。竪穴住居はすべて方形です。山之内遺跡で見たような弥生時代中期の円形の竪穴住居は、後期に入ると方形の住居が混じるようになり、弥生時代の終末にはすべて方形に変化します。邪馬台国の時代の四角い住居には床面に4基の柱穴があり、中央に煮炊きをしたり暖をとるための炉の跡があります。壁際にある穴はこの時期の特徴ですが、何のための穴かは分かっていません。貯蔵用であるとか、入り口の所にあるので入り口の階段を設置する穴とも考えられています。阿倍野筋を挟んで西側と東側の両方で同様の住居跡が出てきています。阿倍野筋南のムラで見つかった土器には岡山県の遺跡で特徴的な土器や山陰の特徴をもつ土器が含まれていました。

また、竹輪のような形の網に付ける錘や飯蛸壺や鉄製のヤスが出土しています。阿倍野筋南のムラも大阪湾に面しており、大阪湾で漁業をしていたことがわかります。阿倍野筋南遺跡で注目しておきたいのは、一辺が10mを越えるかなり大型の竪穴建物があることです。ムラの有力な人物の屋敷だったのではないかと考えられます。

阿倍野筋南遺跡のある上町台地の西の端から台地を西に下った裾にある天下茶屋北2丁目遺跡では、阿倍野筋南遺跡と同時期の飯蛸壺や土錘がかたまっ出てきています。干潟の地層から見つかり、干潟に船着き場があって、そこから船を出したと推測できます。阿倍野筋南遺跡のムラの船着き場(港)だったと思われる。

この辺りはそれ以前には何も無い所で、邪馬台国の時代になって初めてムラができています。弥生時代を通じて未開だったこの場所になぜムラができたのか注目されるどころです。一方、住吉では弥生時代中期まではムラが発達していたのに、後期になってパッと無くなり、今のところ見つからないのはなぜなのか。両方を合わせ考えると山之内・南住吉遺跡のムラが弥生時代後期に移動し、終末期ごろに大阪湾岸に船着き場を設けた阿倍野筋南遺跡のムラをつくったと考えられるのではないのでしょうか。

大阪市内には他にも邪馬台国の時代の遺跡が幾つもあります。先程の弥生時代中期の話に出てきた河内平野南部の平野区辺りも弥生時代中期だけではなく弥生時代後期・邪馬台国の時代を通じて継続的にムラが続き、人が住み続けています。それは大和川下流の平野部が農業を軸にして安定的に生活できたということだと考えられます。それから、大坂城下町跡と呼んでいる北浜辺りから南船場辺りにかけての一角を発掘しますと、秀吉の作った船場の城下町の遺跡の下に弥生時代の段階に形成された大阪湾沿岸部の浜堤ができてきます。そこに弥生時代終末期から古墳時代前期にかけての邪馬台国の時代の遺跡があり、この頃から人が活動し始めたことが、この10年ぐらいの間に分かりました。ただ余り遺跡の遺存状況は良くなく、土器などの出土遺物はわりと出てきますが、建物跡やお墓といったものがそれほど見つかりなくて残念です。

この辺りの地形も単純ではありません。難波津という古代の港が何処にあったのかは昔から議論があります。今一番有力で我々もそう考えているのが北浜の東、高麗橋・道修町辺りです。もっと南の方の三津寺辺りや河内湖に入った森之宮辺りを考える人もおられますし、難波津はこの地域全体の港を総称した呼び名だという人もいます。しかし、主要な港としては、沿岸トラフ(海の中の盆地)がある東横堀周辺を私は考えています。

東住吉区の鷹合・矢田部では邪馬台国時代の土器、それと土器を使ったお墓が1つ見つかりました。もう少しムラのところを発掘できれば具体的なムラの特徴がわかっていくでしょうが、今のところ断片的にしか分かっていません。

淀川デルタの崇禅寺・豊崎神社・本庄東遺跡といった所にも邪馬台国の時代の遺跡がありますが、これらもまだ断片的な資料しか得られていません。

大阪湾交通の発達

この時代のムラムラでは、阿倍野筋南遺跡で見たように他地域の土器が目立つのが特徴です。阿倍野筋南遺跡のように岡山の吉備地方の土器があったり、東海・山陰・北陸・北部九州・四国の瀬戸内沿岸部といった地域の土器も結構出てきます。大阪に限らず近畿地方全体をみても邪馬台国の時代というのは、色々な地域の人達がやってきて交流をしていることが分かっています。彼らがやってきたルートは西からだ瀬戸内海を通り大阪湾に入り、河内湖に入ってこの沿岸に居留する、或いは、淀川のデルタに居留したり、或いはもっと川を遡って北河内や京都南部、南河内に向かうといったことが考えられます。東海地方の土器は河内平野でも出ますが、生駒山地を超えた大和盆地、奈良県の方がたくさん出てきます。より近いので当然ですが、それが生駒山地を越えて河内まで来ているということです。邪馬台国の時代は列島内の人々の交流が盛んになっているだけでなく、中国・朝鮮半島の大陸の文物も近畿地方に入ってきています。河内平野の遺跡では中国製の鏡の破片とか、前漢代の鏡を模倣した小型の国産の鏡が出てきます。

卑弥呼が死んで大きなお墓を作ったのが前方後円墳のルーツであると考えられていて、それ以後が古墳時代と呼ばれています。前期古墳からは中国製の鏡をはじめとする副葬品がいっぱい出てきます。そういうものは普通のムラから出てこないのどうやって持ってきたのか、なかなかイメージしにくいのですが、おそらく宝物扱いで運搬されて近畿地方に持ちこまれたと考えられます。邪馬台国の時代は、弥生時代中期の山之内遺跡のムラの時代に比べ、遙かに頻りに色々な地域から人がやってきて色々な文物・文化・技術・知識を大阪にもたらしています。そういう画期的な時代に阿倍野筋南遺跡が形成されたということが重要だと思います。

弥生時代中期ごろの難波の交通のイメージとしては、大阪湾岸には遺跡がほとんど無く東の河内湖に入った所には森の宮遺跡・桑津遺跡が、淀川デルタには森小路遺跡・同心町遺跡があり、河内平野にはたくさんの遺跡があり、河内湖の沿岸部にムラが発達していたという状況です。おそらく弥生時代中期段階の交通というのは、瀬戸内海からやってくるルートは、難波津の候補としてあげた船場辺りを通り過ぎて河内湖に直接进入し、それぞれのムラに着岸したと考えられます。それに対して邪馬台国の時代というのは上町台地北端の大阪湾岸に砂浜ができて陸地化し、沿岸トラフを利用した船着き場もできたため、多くの人や物資が一旦ここに着岸するという新たな交通の形ができたのではないのでしょうか。もちろん従来通り、直接河内湖に入るルートも盛んに交通があったでしょう。

山之内遺跡のムラの人達はもともと大阪湾を生活の場として活用し、大阪湾を自分達の生活領域と考え、そこでの権益を自分たちのものとしていたので、弥生

時代後期から邪馬台国時代の大阪湾での交通の活発化に危機感を感じ、自分達の勢力圏である大阪湾の支配権を維持するために、大阪湾交通を監視しやすい阿倍野筋南遺跡に新たな拠点を置いたと考えたいと思います。最初に弥生時代の山之内遺跡のムラが武装した人達だったと言いましたが、彼らは大阪湾交通の支配権を強く主張する豪族に成長したのではないかと思います。ひょっとすると住吉区にある帝塚山古墳を造営した一族ではないかとも考えています。この古墳は4世紀の終わりごろの前方後円墳で、大阪市内では一番綺麗に前方後円形が残っており国の史跡になっています。まだ発掘がされていませんが、外面に葺石のある古墳だと分かっています。大阪湾から見たら帝塚山古墳の側面が綺麗に眺められたはずで、大阪湾を船で行く人達に権力を誇示するためにここに造られたのではないかと考えます。

このあと少しずつ台地上の開発が進み、難波津は5世紀ぐらいに、住吉津といっしょにヤマト王権によって国際的な外港として整備され、台地上の高所も王権の力によって大規模な開発の手が及ぶことになります。

上町台地先端の難波宮跡周辺の発掘調査の成果では色々な開発がなされていることが明らかになっています。難波宮跡の南部の谷斜面で初期の須恵器の窯が2基並んで見つかっています。5世紀初頭という日本列島で一番古い時期の土器焼成窯です。また、5世紀後半のガラス小玉の鋳型も出土しています。ガラスのビーズ玉を作るための鋳型ですが、このルーツは朝鮮半島にあり、朝鮮半島でもたくさん出ています。難波宮以外に近畿地方で出土した5世紀代の鋳型は、四条畷市の讚良郡条里遺跡(いま部屋北遺跡と呼んでいます。)と奈良県の布留遺跡にしかありません。

それから忘れてならないのは、大阪歴史博物館の南側で、5世紀の大型倉庫16棟が綺麗に並んで見つかることです。現在1棟だけ復元されて建っていますが、床面積が90㎡ほどの大型倉庫です。こういう倉庫は一般のムラで造れるとは思えないので、ヤマト王権によって造られたと考えられます。倉庫群といえば港につきものですから、難波津に関連して造られた倉庫だと思えます。今でしたら港の岸壁近くに倉庫がいっぱい並びますが、昔はちょっと高台のところに建てることになっていたようです。同じような倉庫群が和歌山県の鳴滝遺跡でも見つかっています。紀ノ川の河口の港を見下ろす高台の上で見つかっています。あと北陸能登半島の七尾湾に面した高台にある万行遺跡でも4世紀代の巨大な倉庫群が見つかっています。これらはいずれも港を臨むような場所に造られている点で共通しているのです。

難波津は5世紀の段階になると港として整備されますが、倉庫以外に5世紀代の住居とか建物跡は余り見つかりません。豪族の居館があってもよいので

はないかと思っているのですが、今のところそういったものは見つかりません。この倉庫群が見つかった時には仁徳天皇の高津宮が見つかったと騒がれたのですが、この地には大規模な倉庫群が造られていることから、邪馬台国時代からの物資・人の交流の活発化、朝鮮半島・中国の国際的な情勢を背景にして、5世紀代に大阪湾が国際的な外交の場になり、外交のための施設として難波津が整備されたことは間違いありません。

一方、住吉津もこの時期にヤマト王権によって整備されたと考えています。住吉大社周辺を発掘しますと一番古い遺物が5世紀です。5世紀代に住吉大社境内の周辺が開発されて豪族が居住するようになったと考えています。また、細井川を挟んで南側に住吉行宮跡がありますが、住吉行宮跡周辺は住吉大社の代々の宮司をしていた津守氏という有力豪族の拠点だった所と考えられています。発掘調査によって、住吉行宮から住吉大社境内にかけての細江川を挟んだ一帯が5世紀ぐらいに大規模に開発され、飛鳥・奈良時代を通じて発展した様子が明らかになってきました。

住吉津も外交の港として機能していて外国の使節もやってきていますが、基本的には大阪湾での海上交通の管理・統制するための港だったのではないかと考えています。大阪湾全体の交通を管理・支配するという性格はずっと遡って弥生時代中期の山之内遺跡の時代から果たしてきた役割だったのかもしれませんが。このように住吉津と難波津という役割を異にした2つの港が、古代の大阪を特徴付けていると考えています。

おわりに

私のもう一つ注目しているのは古代に「玉造江」と言われた河内湖の部分です。河内湖の西岸で上町台地の東裾にあたる、今でいうと森之宮から玉造、玉造から細工谷・勝山にかけての一帯に、河内湖に面した港があったのではないかと考えます。『日本書記』には猪甘津が出てきます。猪甘津は河内湖という淀川と大和川の交通が交差する水上交通の交差点のようなどころにある港であり、その役割は重要だったのではないかと考えています。ただ文献にも余り出てこないし、考古学的にも資料が少なく、意義付けは難しいのですが、住吉区の細工谷遺跡や生野区あたりの数は少ないけれど発掘成果を総合的に見ていくと、猪甘津も大阪の古代史を考える上で重要な港であったと思えます。難波津とか住吉津のような大阪湾に面した外向きの港ではなく、内陸部からの交通が集約される場所としての意義を無視できないと考えています。これからもう少し猪甘津についての研究を進めることで大阪の古代の特色がより明確になっていくのではないかと考えています。その辺がハッキリ分かりましたら今度は猪甘津についてお話したいと思えます。

財団法人住吉隣保館の動き 住吉地区に関わった各種資料の 整理事業について

財団法人住吉隣保館では、2010年度以降、住吉地区に関わった各種資料を整理し、目録とデータベースづくりに取り組んでいます。その結果、以下の4点の資料整理が行われ、目録とデータベースが作成されてきています。(但し、4は途中)

1. 住吉地区資料の目録データ

住吉地区を中心とした部落解放運動、同和事業、隣保館活動、人権協会、同和教育研究協議会、故住田利雄さんの所蔵資料等3, 527件の目録です。

他地区と比較し、住吉地区の資料は内容的にたいへん充実したもので、手応えの十分ある資料に恵まれています。とくに故住田利雄さんが、会議ごとに配布された関係資料を茶封筒に未整理なまま一まとめに保存されていたなかには、全国の隣保館の動向、解放運動の重要資料、研究所や支部内部の複雑な事情を示す資料などが含まれています。それ以外にも、全国水平社結成の翌1923年から始まる「住吉地区整理事業」に関する資料があります。また、戦後は大阪女子大学のセツルメント活動が住吉で展開されていましたがその資料が3点ばかり出てきました。この他、住田利雄さんが従軍中に詠んだ和歌や、著名な労働運動活動家・平沢栄一さんの獄中書簡が150点ちかくありました。作業は、大阪市立大学人権問題研究センター、同和地区関係資料研究会(代表・上杉聰さん)に依頼しました。

2. 故大川恵美子さんの絵画の目録とデータベース

2010年12月26日、89歳でなくなった大川恵美子さんが生前、自らが生まれ育った住吉地区のくらしと部落解放運動の姿を描いた作品は108点におよびます。絵画の内、57点は水彩画で、51点がスケッチです。108点の作品の内、99点が住吉の仕事と暮らしに関する絵で、自画像3点を含む9点が人物画です。住吉の仕事と暮らしに関する絵画を分類すると①衣・食・住に関する絵が53点、②仕事に関しては15点、③年中行事の関連画が8点、④運動や差別を風刺した絵が12点、⑤その他に大別できます。

作業は、友永雄吾さん(国立民族学博物館外来研究員・佛教大学・大阪産業大学兼任講師)に依頼しました。

3. 住吉地区に関わった民具の目録とデータベース

財団法人住吉隣保館が所蔵していた住吉地区に関わった民具の目録とデータベースを作成しました。その結果によると所蔵していた民具の種類は126種類です。そのうちの43種類の民具については、1点以上確認することができました。最も多く重複する民具のベスト3は、カンナ29件、雪駄12件、下駄11件です。「文化庁分類」に従い281件の民具を分類すると、衣食住では128件、生産・生業では187件、交通・運輸・通信は45件、交易は61件、社会生活では2件、信仰では1件、民俗知識では3件、民俗芸能は4件、競技・娯楽・遊戯では4件、人の人生は1件、年中行事は13件、口頭伝承は0件となっています。

作業は、友永雄吾さん(国立民族学博物館外来研究員・佛教大学・大阪産業大学兼任講師)に依頼しました。

4. 住吉地区に関わった実態調査の目録

住吉地区に関する実態調査に関する目録の作成及び主要調査資料の解題作成をおこないました。また、報告会を2回開催しました。目録作成に際して、①財団法人住吉隣保館に所蔵していた報告書等資料、②上記の「1、住吉地区資料の目録データ(浅香人権文化センター保管)」、③大阪市立大学学術情報センター、④部落解放・人権研究所、⑤京都部落問題研究資料センターのデータベースを用いました。それらの中から住吉地区に関する調査資料の収集と整理・統合を行いました。作成した調査関連目録の内容としては130点程になります。②の一次資料や聞き取り調査、識字学級の語りの諸資料等を含めると膨大な数に上ります。今回は聞き取り調査等の質的調査は取り上げず量的調査のみに絞りました。なかには希少性の高い資料も散見されました。例えば1956年の大阪市民生局『住吉地区実態調査』、1957年の大阪市同和地区促進協議会住吉地区による『大阪市住吉地区の概要』、1966年の部落解放同盟住吉支部長住田利雄さんが著した『大阪市住吉地区部落白書』があげられます。これらは、部落問題にとどまらず戦後大阪の社会保障や福祉政策を読み解く上でも貴重な資料であるといえます。

作業は、矢野亮さん(立命館大学生存学研究センターRA)に依頼しました。